



税の在り方

学校法人 高野山学園 高野山高等学校 三年 長谷川 裕介

誰しもいつかは働かなければならない。そんなこと当たり前のようになっている。働いて給料を得てその給料から厚生年金が引かれ所得税も引かれ・・・そうして引かれ、手元に残った給料で日々を過ごしていかなければならない。納税は義務。そしてその義務を果たせば将来、老後に年金という形で貰える。そう今まで考えていた。しかし現実はその上手くいっている訳ではなさそう。年金を受け取れる年齢が六十歳から六十五歳に上がった。ひとつの要因として少子高齢化が進んでいる事が考えられるだろう。少子高齢化が進んでしまったのだから仕方ない話ではある。かと言って仕方ないで済ましてしまうことができない話であることは確かだ。

新しい世代。次の社会を担っていく若者が日本では不足している。結婚して夫婦になり子供を産んでその子供がまた結婚し子供を産む。そうして増やしてきた人口がどうも伸び悩んでいると思われる。それは、結婚する事を考えていない人や結婚しても子供を産まない考えの人、さらには金銭的に子供を産めないという家庭も少なくはないはずだ。子供を育てるのは無料じゃない。食費もかかれば衣服も買わなくてはいけない。働いていて面倒を見れないなら幼稚園や保育所に預けなければいけない。それにもお金はかかる。結構な額だ。自分たちの生活に加え子供を二人も三人も産むなんてそう簡単なお話ではないのだ。実際、一家庭の夫婦が三人以上子供を産まないとお金は増えていく事は無い。結婚しない人もいるからとどだ。しかしそんなお金は無い。育てようにも育てられない。ならどうしよう？国が援助しよう！そんなお金があるのか？いいえ、ありません。国がもっと色んなことにお金を使うなら財源である歳入を増やさないと。つまり税金なのではないか。つまり歳入の元を増やさなければならぬ。つまり税金なのだ。

結局ここに戻ってきてしまった。だからと言って増税すればいいという話でもない。現状でも生涯に収める税金は五千万近くにもなる。働いていない学生の僕の意見でも不満はある。しかしこれに付け加え僕らの世代が税金を納めても、少子高齢化が進み続けるなら僕らが年金で貰う額はさらに減るだろう。そのうえで少子高齢化を防ぐ為といわれ、もしくは何らかの理由で増税されたとして不満が少なくとも増えることは確実だろう。なんの為に働いているのかバカバカしく思えてしまう。皆が皆、国を発展させるために働くという大義をもちあわせている訳では無いだろうから。しかし、だからと言って自分にできることを探さず誰かが何とかしてくれと待っていることは良くない。国民の一人一人が政治について興味感心を持ち、税の在り方、もっと言えば国の在り方について考えていくことが必要ではないかと僕は考える。